

Young Officials' Camp 2015

参加報告書

札幌地区バスケットボール協会

政氏 拓留

1. 期日

平成 27 年 8 月 14 日(金)～16 日(日)

2. 会場

埼玉県立スポーツ総合センター (講義会場、1 日目実技会場)

埼玉県上尾運動公園体育館 (2、3 日目実技会場)

3. 宿泊

埼玉県立スポーツ総合センター

4. 参加者

25 歳以下の日本公認審判員 男性 23 名 女性 17 名 計 40 名

| | | | |
|---------|-----|--------|-----|
| 北海道ブロック | 4 名 | 東海ブロック | 3 名 |
| 東北ブロック | 3 名 | 近畿ブロック | 5 名 |
| 北信越ブロック | 2 名 | 中国ブロック | 3 名 |
| 関東ブロック | 7 名 | 四国ブロック | 2 名 |
| 東京ブロック | 8 名 | 九州ブロック | 3 名 |

5. 講師

FIBA Head of refereeing Mr. Carl Jungebrand

1 班 関口知之氏・前田喜庸氏・小澤勤氏・高城邦弘氏・緒方崇氏

2 班 吉田正治氏・山崎人志氏・加藤誉樹氏・須黒祥子氏

3 班 吉田利治氏・平原勇次氏・北島寛臣氏・増渕泰久氏

4 班 大野健男氏・安西郷史氏・堀内純氏・平野彰夫氏

(順不同)

6. 日程

● 8月14日(金)

- 12:30 受講者受付
13:30 開講式
13:50～16:50 〈実技Ⅰ〉
「よりよいプレゼンテーションの基本、
体幹をつくるトレーニング・アジリティトレーニング」 野田拓司氏
17:00 入浴
18:00～19:00 夕食
19:00～20:55 〈講義Ⅰ〉
Mr. Carl Jungebrand (FIBA Head of refereeing)
21:00～23:00 研修時間
23:00 就寝

● 8月15日(土)

- 6:30 起床
7:00～8:00 朝食
9:00～17:00 〈実技Ⅱ〉 高校生モデルゲーム
17:00～18:00 移動、入浴
18:00～19:00 夕食
19:00～19:20 〈講義Ⅲ〉
「YOCから世界へ」 加藤誉樹氏
19:20～20:40 〈講義Ⅳ〉
「ルール・マニュアル」 平野 彰夫 規則グループ長
20:40～21:00 閉講式
21:00～23:00 研修時間
23:00 就寝

● 8月16日(日)

- 6:30 起床
6:30～7:00 清掃、片付け等
7:00～8:00 朝食
8:00～9:00 移動
9:30～14:00 〈実技Ⅲ〉 高校生モデルゲーム
(実技終了後、各自帰りの交通機関にあわせて随時解散)

7. 講義参加報告

講義 I 講師 Mr. Carl Jungebrand (FIBA Head of refereeing)

この講義では、オリンピック、ワールドカップでレフリーをされていて、FIBA REFEREE の責任者を務めていらっしゃる Mr. Carl に審判員にとって必要な事を講義していただきました。

- ・ 審判としての夢はなにか

審判員に限らず、夢や目標をもっている人は大勢いる。しかし、自らの夢・目標を口外する人はなかなかいない。夢・目標は口外している人しか達成できない。そして、チャンスは全員同じように転がっている。その中で手に入れられるのは自ら努力している人間である。夢に向かって努力できるのは他人ではなく、自分自身である。

- ・ レフリー(審判員)として

FIBA が必要としている審判員は、自分自身を見つめる事ができる人である。バスケットのレフリーである前に一人の人間である。なにか上手くいったときは自分ができると思込み、うまくいかなかった時は他人のせいや犬のせいにしたりする傾向があると思う。審判として何かに挑戦しなければいけない機会が多くあると思う。しかしそれには日々どのように生活しているかが影響してしまう。胸を張って目標を口外できる生活を送っていて、自分自身を見つめることができる人間を必要としている。

- ・ レフリーもアスリートに

25年前のオリンピックを吹くようなレフリーでさえもアスリートのように見えなかった。しかし、今日バスケットのレフリーはアスリートのようにトレーニングを積む必要がある。見かけのため・走る能力・目に見えないトレーニングが必要だ。

FIBA にもフィットネスコーディネーターがいて、【スピード・身体の強さ(体幹等)・柔軟性・回復力】などを高めるためのプログラムを作成している。ストレッチやクールダウン、エクササイズそして食生活などの重要性をもう一度考えて欲しい。

- ・ FIBA レフリーが実際に行っていること

我々は、日本のレフリー、アメリカのレフリーなど国で区別するのではなく良いレフリーを育てようとしている。ある試合でコーチがレフリーに対して不平・不満を表していた。それを感じた時にレフリーとしては判定を下すことも大切であるが、すべての事をコントロールすることが大切であると思った。これは、レフリーとして信頼されなければすべてをコントロールすることは難しい。例えば「自分の方が貴方たちよりも立場が上だから言うことを聞け。」などと言い選手、コーチをコントロールする事では信頼関係は生まれにくい。レフリーもコーチも選手も観客も、お互いを信頼し合うことですばらしい関係が築けるのだと思う。では、信頼をどのように勝ち取るか。ゲームを始めるのはプレイヤーではなくレフリーである。ゲームをコントロールすることとサービスプロバイダー(サービスを提供するもの)であることの二つを考えて臨む必要がある。FIBA レフリーはこれらのことに対応できるよう準備をして試合に臨んでいる。

- ・ 言葉以外の手段でレフェリングする準備できている事を伝える必要がある。

もしワールドカップ、オリンピックの決勝でレフリーをすると考えると、約2万人もの観客が見ている中、そのレフリーの伝えたいことを言葉以外の方法で伝えなければ会場全

員には伝わらないであろう。ある国に身長も低いFIBAレフリーがいた。そのレフリーは身長の高いレフリーよりも体を上手く使い選手、観客に伝える方法を見つけていた。見かけが強く見えるレフリーは一年間で次のステップにあがる可能性が高いであろう。将来、体を使ってレフリーをすることがスタンダードになる。

- 自分のエリアを完璧に

見えたものを判定するのではなく、プレイの始まりから終わりまでの長い時間把握して判定することが望ましい。プレイを予測することも大切であるが、どのようなプレイ(バスケットの技術、戦術など)が起こるかを知っていることが重要である。プレイに近づきすぎると何が起きているかを把握できないことがある。(速く動いているように見える)一定の距離、角度(45°)の良いポジションで判定する必要がある。ベストポジションで判定することを求める必要があるが、ポジションを求めすぎてしまい判定をおろそかにしてはいけない。重要なのは判定を下すことである。

- プレイを分析する

レフリーは思い込み(感情)、瞬間で見てプレイを判定してしまうことがある。そうではなく、自分のエリアで起きていることを分析し判定を下す必要がある。大きいコンタクトがあったから取り上げるのではなく、小さいコンタクトでも取り上げなくてはならないものもある。例えば、自分のエリア外(相手のエリア)で起こった現象もすべて取り上げて相手審判と協力したと思い込んでいるレフリーがいる。しかしそれは、そのファウルを見て反応しているだけであり助けているのではないことが多い。相手審判を助けるということは自分のエリアで起きていることを100%分析した上で、しかも相手審判が取り上げるチャンスがあったにもかかわらず取り上げられなかったときに初めて笛をいれるのが協力である。

- Open angle

現行のマニュアルではスペースを捉えるためにプレイを受けることが基本である。しかし最近ではクロスステップ→プレイが向かっている方向と反対に動きスペースを捉えるという方法である。

講義Ⅱ 講師 加藤 誉樹氏 (国際審判員・NBL担当審判員)

YOCに参加し現在は国際審判員として活躍されている加藤氏に講義していただいた。努力の積み重ねが結果に繋がるという気持ちをもって、どのカテゴリの試合にも臨もうと思った。

- ABC【A・当たり前のことを B・馬鹿にしないで C・ちゃんとやる】

レフリーをするにあたり、当たり前のこととは笛を吹くことやファウルを取り上げること、ヴァイオリションを正しく判定することなどが挙げられる。試合には勝ち負けが関わっていてゲームレベルが上がれば上がるほど、当たり前のことをちゃんと吹けないとレフリーとしての信頼を失うことに繋がる。大きな目標を達成するためには毎日、毎試合の小さな目標を達成して初めて可能になる。バスケットに限らず日々の生活でもABCを実践して欲しい。それが審判としての信頼にも繋がるはずである。

講義Ⅲ 講師 平野 彰夫氏 (規則グループ長)

平野氏の講義はDVDでシリンダーの概念についてのディスカッションを行った。改めてルールブック、マニュアルを熟知することの必要性を再認識した。

- ・ 2015 バasketボール競技規則 33.1 プレイヤーの位置とシリンダーの考え方
プレイヤーがコート上で普通に両足を開いて位置(ノーマル・バスケットボール・ポジション)を占めたとき、そのプレイヤーが占めている位置とその真上の空間をシリンダーという。
→この位置を占めて接触が起こったとしてもディフェンスに責任はない。
- ・ 33.3 正当な防御の位置(リーガル・ガーディング・ポジション)
(1)防御側プレイヤーが相手チームのプレイヤーに向かい合い、両足を普通に広げて床につけたとき、その防御側プレイヤーは最初の正当な位置を占めたことになる。
(2)正当な防御の位置には真上の空間も含まれるので、真上の空間の内側であれば、真っ直ぐ上に手や腕を上げたり真上にジャンプしても良い。
→ファウルが成立するためには、「接触があるか、責任はどちらか、影響があったか」の3つを判断する必要がある。そして、瞬時に判定に対して説明できる準備をしていなければならない。

8. 実技参加報告

実技Ⅰ 講師 野田 拓司氏

「よりよいプレゼンテーションの基本、体幹をつくるトレーニング・アジリティトレーニング」

FIBAが作成したトレーニングマニュアルに記載されているトレーニングを約3時間行った。選手もトレーニングを積むようにレフリーにも同じようなトレーニングを積む必要があるということで以下のようなことを行った。

【FIBA Manual for Basketball Referees' PHYSICAL TRAINING】を参考に実施

- ① ダイナミックストレッチ(動的ストレッチ)
体幹を意識し、上半身と下半身別々な動きを取り入れる。
- ② アジリティトレーニング
 - ・ ランニング(10分間走)
 - ・ インターバル走(fast1分→slow2分→fast2分→slow1分→fast1分)
 - ・ ダッシュ(50m×1本, 40m×2本, 30m×3本, 20m×4本, 10m×5本を回復させてから行う)
 - ・ RSA【Repeated Sprint Ability】(40m×3本, 30m×3本, 20m×3本を回復させずに行う)
 - ・ ダッシュ(オールコート3往復×6本)
- ③ 体幹トレーニング
プッシュアップ
スクワット

実技Ⅱ・Ⅲ 高校生男女のモデルゲームを使用した実技講習

① 平成27年8月15日(土) 9:30～ 朝霞-小山台 (男子)

主任: Mr. Carl Jungebrand

主審: 布施修平(京都) 副審: 政氏拓留(北海道)

〈講評〉

- ・ 昨日の講義であった笛を外してのコミュニケーションが必要な場面がいくつもあった。例えばファウルを取り上げレポートした後、アクティブ・オフィシャルになる場合に笛を咥えたままだとコミュニケーションが取れない。それだけで選手は審判に対して不信感を抱いてしまう。今後は笛を外し、積極的にコミュニケーションをとる習慣を身に付けて欲しいと思う。
- ・ トランジションが起こった時のトレイルからリードへのローテーションについては、スリーポイントラインと制限区域のラインの中間点(セットアップポイント)を目指し移動する。ここのニューリードになるとき最も移動を速くし、余裕を持って判定する準備が必要がある。速く移動するという事は曲線を描いて(サイドラインの外側を通過して)移動するのではなく2点間の最短距離である直線上を移動するべきである。そして、トランジションが起こった際には素早くターンをしてダッシュの一步目を素早く出す必要があるがそれはよくできていた。
- ・ トレイル、リード共に最も見やすい角度と距離を求めることが大切である。例えば、トレイルのエリア1で1on1が始まる時に、ある程度の距離を取って確認していればその1on1から2on2や3on3の動き視野にいれ確認することができるが、必要以上に近づきすぎてしまうと選手の大きさ、スピードが同じであったとしても捉えることが困難になってしまう。このような状況は避けたいので必要以上にペネトレイトすることはない。リードでもトレイルと同じような角度と距離を取ると非常に見やすくなる。
- ・ リードで動く必要の無いときに動いてしまっていることが気になる。動くことと判定することのどちらが重要かという判定することである。このゲームではOpen angleを取りセットアップポジションでプレイを捉えることは良くできていたと思う。適切な角度、距離でプレイを捉えていて自分の判定できる範囲内(エリア)でプレイが移動している時には動く必要はない。全体を捉えることができるベストポジション(Open angle)にいるのにもかかわらず移動してしまうことは、その1on1だけに焦点を当てすぎてしまい、他のプレイを捉えにくくなってしまう。制止することは頭の動き、目線の動きを少なくしプレイを捉えることのできる非常に重要なことである。制止していれば次のプレイを予測したり、予期せぬプレイが起こったとしても対応できる余裕を持つことができる。
- ・ リードで右に行っているときにショットが成功した際に、直ちに左に戻る必要はなくその場で制止している方が次のプレイに対応することができる。パスがコートに入り、スローインをした選手がコートに戻るのを待ってからトレイルポジションへ直線的に移動すればよい。もし左に戻ることを優先しているると視野を切ってしまう原因

つながりプレスディフェンスに対応できなくなってしまう。リードで良い位置、角度、距離を取れているのにトレイルに移るときにそれが失われてしまっただけでは判定できない。なにかあったときに対応できるように準備が必要である。そして、ニューリードになるときに気をつけなければならないのは、コートに入るのはスローインされたボール→スローインした選手→ニューリード(審判)の順番を必ず守らなくてはならない。フロントコートにボールが移動したときに無駄な動きをせず適切な位置に移動することができる。また、この順番を守ることによってコートの様々な情報を得ることができる。

- ・ レポートする際に大切なことは、まずしっかりとバランス良く立ち両足に均等に体重をかけて一呼吸置いて肩をそろえる。その上で自分の肩のラインよりも上に仮想の窓がありそこに向かって番号、何が合ったか、次の処置はなにになるのかを示す必要がある。肘を固定し仮想の窓に向かって勢いよく力強くはっきりと番号を示す。このときに必ず笛を外しオフィシャルやベンチ、観客につたわるようにコミュニケーションを取る必要がある。大きな声で何番が何をしたのか、種類、処置をはっきりと伝える。日本人独特の文化である奥ゆかしさは大切にしたいと思うが、ここはバスケットボールの場なのでそれを捨てる覚悟が必要だ。そして忘れがちなのが、レポートが終わりゲームを再開する場所まで移動をするまでがプレゼンテーションである。このときにレポートが終わってから次の位置に移動することを考えるのではなく、レポート後すぐにそして直線的に移動することが大切である。これが説得力にも繋がる。
- ・ 失敗を恐れることなくチャレンジして欲しいと思う。失敗、経験から学び自分の糧にしてレベルアップをして欲しい。バスケットのレフリーは普通の人と違い自分の失敗を自分で探そうとする。自分の失敗は目を瞑りたいのが普通である。トップレフリーでも明らかな間違いは必ずある。一試合 100 回コールして 95 回正しく、5 回あきらかな間違いがある。できれば 100%を目指して欲しいが 95%くらいがトップレフリーの基準である。選手、観客が期待するのは 100%のレフリーを求める。それに近づけるように頑張る欲しい。

② 平成 27 年 8 月 15 日(土) 14:45～ 鷹の台-都立駒場 (女子)

主任：Mr. Carl Jungebrand 前田喜庸氏 小澤勤氏 高城邦弘氏 緒方崇氏

主審：政氏拓留(北海道) 副審：勝呂友海(島根)

〈講評〉

- ・ ファウルの判定、ポストアップに対しての見方タイミングは良かった。講義であった Open angle で適切な距離、角度をとれていた。
- ・ リードでエリア 4 からショットがあり、エリア 6 にボールが落ちても急いで移動する必要はなくトレイルとの協力の中で 10 人を把握できていれば良い(ボクシングイン)。
- ・ ニュートレイルになる際、プレスディフェンスで無ければボールマンを必ずしも追従する必要はない。サイドラインよりも内側を直線的にトレイルポジションに移動できれば良い。

- ・ レポートはテーブルとの間に選手がいなければ7mほどの距離で行っても良い。(センターライン上まで移動する必要はない。)
- ・ マニュアル通りのエリア分担を守る必要がある。ツーパーソンでもダブルホイッスルで取り上げる場面は多くないはずである。リードレフリーが取り上げず、100%の自信があるときのみトレイルから取り上げても良い。しかし笛が鳴るタイミングは通常リードが取り上げるタイミングよりも遅いはずである。
- ・ トラヴェリング、パーミングの判定はあっているのか。確認が取れていないのに雰囲気を取り上げていないか。
- ・ プレゲームカンファレンスで具体的なケースの対応についても決めておく必要がある。

9. 総括

日本公認2年目で、24歳という年齢上時間が無い中で今回の講習会に参加させていただき感謝申し上げます。同年代のレフリーを目の当たりにし、今のままでは目標に達成することは難しいと感じました。Mr. Carlの講義でもあったようにレフリーもアスリートでなくてはならないという意識を持ち、今以上にトレーニングを積む必要があることを実感しました。また、正しい判定をするレフリーを目指すべく、今回の講習会で学んだことを少しでも多く実践していきたいと思います。

2015年より競技規則が新しくなり、今後マニュアルも改訂されると思うのでルールを熟知するのは勿論ですが、特殊な現象にも対応できるようにもう一度初心に返り勉強していきたいと思います。

実技講習でYOCオープニングゲームを担当させていただき全受講生、講師の方々に見ていただくという今までにない緊張感の中レフリーをできたことは非常によい経験になりました。また2試合続けてMr. Carlに試合を見ていただき講評いただいた貴重な経験を生かし、また国際大会の場で成長した姿を見せられるように努力していきたいと思います。

10. 謝辞

今回、このような機会を与えてくださった北海道バスケットボール協会の皆様、札幌地区バスケットボール協会の皆様には心から感謝申し上げます。これも、講習会等皆様のご指導があったからこそ、ここまで良い経験をさせていただくことができました。これからも、この経験を大切にし、札幌地区バスケットボール協会、北海道バスケットボール協会の皆様のために尽力していく所存です。これからもご指導ご鞭撻の程、よろしく願い申し上げます。